青森タイムトラベル 第20回

八甲田山麓の温泉群

【問合せ】市民図書館歴史資料室（☎017―732―5271）

▲ 写真①　下湯温泉と市営バス（昭和29年頃・青森県史編さん資料）

▲ 写真②　萱野茶屋（昭和30年代・青森県史編さん資料）

青森市は青森県最大の都市です。駅周辺には繁華街が形成されています。しかし同時に市の南方には八甲田連峰が迫り、高山植物を観賞し、スキーに興ずることができます。都市と山村が同居する市域といえるでしょう。繁華街の歴史については、以前紹介したことがあります（平成26年5月1日号）。このため今回は、市の最南端にあたる八甲田山麓の話題について紹介したいと思います。

下湯温泉

八甲田山麓には多くの温泉が存在します。それらの中には開発の影響を受け、現在は存在しないものがあります。下湯（しもゆ）温泉はその一つです。温泉は県道122号を南方へ進み、堤川の最上流部分にありました。

昭和29年（1954）から、下湯温泉へ青森市営バスが運行を開始しました【写真①】。市営バスというと通勤通学利用という印象が強いですね。実は、昭和30～40年代の市営バスは浅虫温泉や八甲田山麓、さらに夏泊半島や津軽半島の龍飛崎などにも路線を有していたのです。

バスの運行もあって、中心街から比較的近かった下湯温泉は、日帰り・宿泊共に人気がありました。堤川上流にある温泉宿らしく川魚料理も提供していました。

しかし昭和44年の台風で堤川が氾濫。桜川団地や松原地区に大きな被害をもたらしました。このため堤川上流に下湯ダムを建設することになり、温泉宿は廃業となりました。昭和63年にダムは竣工（しゅんこう）し、温泉の跡地はあやめ公園となりました。

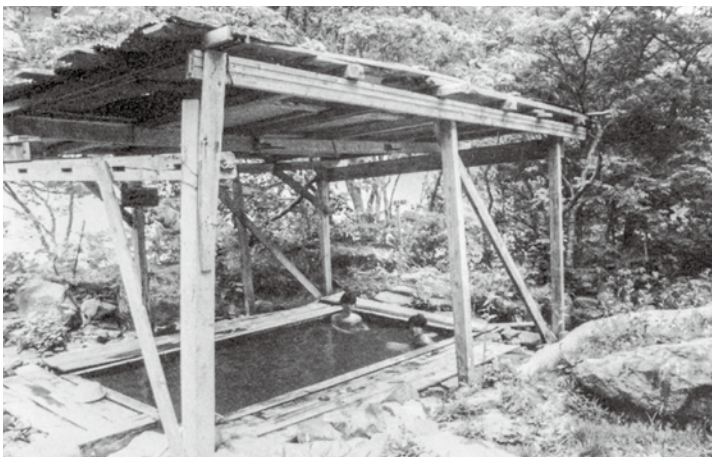
酸ケ湯温泉

八甲田山麓の温泉で最も有名なのが酸ケ湯温泉です。昭和29年（1954）に国民保養温泉第1号に選ばれた青森市の名所の一つです。平成25年（2013）に積雪5メートルを超え、全国的に注目されたことは記憶に新しいですね。

現在の酸ケ湯温泉までは道路が整備され、バスが通年運行しています。しかし、かつて冬場は雲谷か萱野茶屋までしかバスは運行していませんでした【写真②】。このため湯治客やスキー客は、そこから馬そりに乗り換えて酸ケ湯へ往復したのです【写真③】。

昭和40年の宿の案内書によると、馬そりは3月から4月まで定期的に運行されていました。運賃は600円、荷物は1キログラムあたり16円、雲谷～酸ケ湯間を5時間かけていました。

▲ 写真③　酸ヶ湯温泉と馬そり（昭和36年３月18日・小山内文雄さん撮影『愛しの昭和』泰斗舎より転載）



◀ 写真④　田代元湯温泉（昭和60年頃・下池康一さん撮影『グラフ青森』昭和61年８月号より転載）

「青森タイムトラベル」バックナンバー市ホームページで公開中

パソコンやスマートフォンでご覧ください。

広報あおもり「青森タイムトラベル」　検索

「『新青森市史』通史編第４巻　現代」は、市民図書館等で閲覧できます。販売場所は歴史資料室へお問合せを。

昭和57年以降、バスが通年運行となり、馬そりは姿を消していきました。機械除雪が進んだ現在、馬そりを知らない市民は多いと思います。しかし、馬そりにお世話になった市民は冬の風物詩を懐かしく思い出されることでしょう。特に当時子どもだった市民にとって、馬そりは恰好の遊び道具でした。そりにつかまって遊んで怒られた経験を話してくれる市民はたくさんいます。

こうした話も後世へ伝えていかないと埋もれてしまうでしょう。市民の皆さんも手記や日記、講演会や座談会を通じて、思い出や体験談を若い世代に語り継いでいって欲しいと思います。

田代元湯温泉

八甲田山麓をめぐる道路は大きく分けて二つあります。一つは酸ヶ湯温泉や睡蓮沼を通る国道103号（八甲田・十和田ゴールドライン）です。もう一つは雪中行軍遭難記念像や田代平高原を通る県道40号です。

現在、県道40号にバスは運行されていません。しかし、かつては市営バスが走っていました。終点は天間林村（現七戸町）の上北鉱山で、昭和34年（1959）当時で1日3往復ありました。当時の上北鉱山は社会見学に好適と言われ、実際に三戸小学校の子どもたちが修学旅行で立ち寄ったこともありました。

上北鉱山は昭和19年に月産1千400トンを超える銅を産出しました。戦後も操業を続け、鉱山町を形成していました。昭和32年には約3千500人の人々が生活していました。

鉱山で働く作業員たちが、湯治で身体を休めた温泉が田代元湯温泉でした【写真④】。しかし、温泉自体は駒込ダムの建設に伴い水没する運命にあります。

開発と保護の両立

下湯温泉や田代元湯温泉は、現在すでに廃湯状態です。景勝地でもある天然の温泉が消えることは非常に残念ですが、災害予防をはじめ市民生活を維持するための開発も無視できません。

景勝地の保護と生活維持のための開発は両立が難しいといわれます。しかし都市と山村が共存する青森市にとって、常に市民が考えるべき問題とも言えるでしょう。

（元『新青森市史』通史編執筆協力員
中園裕〈県庁県史編さんグループ〉）

※八甲田山麓の温泉と歴史について、さらに詳しく知りたいかたは「『新青森市史』通史編第4巻 現代」第2章第3節をご覧ください。